足立力也著

『丸腰国家―軍隊を放棄したコスタリカ 60年の平和戦略』

扶桑社新書　254ページ

日本でコスタリカが話題になる時，非武装・中立が取り上げられることが多い。本書は，コスタリカ研究者の足立力也氏が，同国の非武装・中立に関しその成立過程と実態を一般読者向けにわかりやすく解説したものであり，同時にコスタリカに興味をもつ者にとって親しみやすい入門書だといえる。

著者はコスタリカが非武装を選択した背景として，財政的理由のみでは説明不足であり，それは国内政治の混乱から脱却するための道であり，さらに米国の影響力が強く代理戦争が頻発する中米において，非武装はそうした状況への現実的対応でもあったとする。また国内外の対立により紛争が懸念される状況において，同国が選択した道は積極的中立政策であった。著者はその理由として，どちらにも味方しないという消極的中立では両者から敵とみなされてしまう可能性があるが，紛争発生時に積極的仲介者として介入する政策により非武装で紛争を回避することができたとしている。1987年に同国のアリアス大統領は，中米紛争の平和的解決に貢献した業績によりノーベル平和賞を受賞している。

また，日本とコスタリカの憲法を比較し，両国の憲法における非武装を規定した条項とその対応の相違を提示している。著者は，日本では非武装に関し条文で厳格な規定をしているにもかかわらず，曖昧な解釈により軍事力を拡大しているとみる。これに対しコスタリカは，解釈に余裕のある規定を厳格に運用しているという相違がみられると述べている。こうした非武装・中立を実践しているコスタリカは，理想的な「パラダイス」にもみえる。しかし，著者は現実のコスタリカには，政治腐敗，人権侵害，貧困など解決すべき問題が多々存在していることにも言及している。平和憲法をもつ日本国民にとって，本書は示唆に富む内容の著作である。（宇佐見耕一）

村上勇介・遅野井茂雄　編著

『現代アンデス諸国の政治変動 ―ガバナビリティの模索』

明石書店　2009年　421ページ

本書は，ポスト新自由主義と形容できる時代に突入したラテンアメリカ，中でも近年，最も顕著に政治の不安定化がみられるアンデス諸国（ボリビア，コロンビア，エクアドル，ペルー，ベネズエラの5カ国）の現状に焦点を合わせた画期的な論文集である。「比較研究編」とされる第Ⅰ部では，ポスト新自由主義期の開発政治，政党システム，先住民運動，アウトサイダー政治家，そしてコカ・ナショナリズムが，比較の視点から丹念に論究される。また「各国分析編」の第Ⅱ部では，5カ国それぞれの現代政治を特徴づける多様なトピックが（プントフィホとチャビズモ，ボリビアの左派アジェンダ，エクアドルの政変，コロンビア政党の離合集散，ペルーの小党分裂）詳細に論じられる。

近年のラテンアメリカといえば，経済・社会政策や政治手法の穏健さおよび社会状況の平穏さから，とかくブラジルやチリがその「優等生」としてもてはやされてきた。しかし，さまざまな問題を孕みながらも（また，その方向性への賛否はどうであれ）現代のアンデス諸国では，そうした政策・手法の優劣や実現可能性が激しくしのぎを削ってきた（または現在もその途上にある）という意味で依然「活きた政治」が展開されていると言える。本書はこうした「政治」の姿を，我が国屈指のアンデス政治研究者らがさまざまな角度から探求するものである。

筆者もこのところアンデス諸国の政治的な流れや現状をフォローしているが，常々ラテンアメリカの中でもこれらの国々ほど（比較）政治学者の好奇心をそそり，その分野の知識を深めたり，再認識するのに生きた教材はないと感じている。そういう意味でも本書はラテンアメリカ政治の今を捉えるだけでなく，「政治とは何か」を理解する上で格好の機会を提供するものとなるであろう。（上谷直克）

金七紀男著

『ブラジル史』

東洋書店　2009年　xii＋303ページ

現在までのブラジルの通史をまとめた本書は，同国について学ぶ大学生向けの教科書として活用されることを主眼に置いている。しかし，近年日本でも同国への関心が高まってきたため，教養書として一般読者のブラジル理解に資することも意図している。本書の特徴としては，ブラジルをより全体的に把握すべく政治や経済だけでなく社会や文化にも紙幅を割いている点に加え，同国史の中で「疎外された存在」であるインディオにも焦点を当てている点を挙げることができる。

全12章から構成される本書は，ブラジルの歴史を植民地期（～1822年），近代（～1930年），現代（～現在）の3部に大別している。特に植民地期に関して，同時代を専門とする著者がインディオに焦点を当てたことから，その歴史が類書に比べ詳述されている。また通常は1910年代から始まるとされる現代を，本書は「現在のブラジル人が同じ時代を生きていると共感する時代」として1930年のヴァルガス革命とともに始まったと捉えており，非常に興味深い視座といえる。

歴史には，それを語る者の解釈や意図などにより構築される面があるため，唯一無二の「歴史」は存在しない。しかし，本書が教科書や教養書たることを目的としている点を考慮し，本書の問題点として，通説や史実と異なる記述が散見される点，脚注がないため特殊用語などが理解困難な点，信憑性を裏付けるデータの出所が明記されていない点などを指摘することができる。

ブラジルに関しては，2008年の日本移民100周年後も五輪開催が決定するなど注目や認知度が増してきている。しかし一方で，日本での同国に関する情報や知識は豊富とはいいがたい。したがって本書は，歴史を広く学ぶためはもちろんのこと，著者がいうように「ブラジルの現在，将来を考えるうえで」一助となる有益な書だといえよう。　（近田亮平）

小澤卓也著

『コーヒーのグローバル・ヒストリー ―赤いダイヤか，黒い悪魔か』

ミネルヴァ書房　2010年　326ページ

世界の中でラテンアメリカ諸国は，コーヒーの生産，輸出において重要な位置を占めている。生産，輸出とも世界の3割前後を占めるブラジルのほか，コロンビア，ペルー，中米諸国を合わせると，その割合は生産で6割，輸出で5割を越える。コーヒーはラテンアメリカ諸国の伝統的な輸出農産品であるが，スペシャリティ・コーヒーのブームや，フェアトレードの拡大など，新たな動きもでてきている。本書は，コーヒーの歴史のほか，生産や貿易の動向，そして最近の新たな動きまでを理解するのに適した一冊である。

導入部にあたる第Ⅰ部では，アフリカにおけるコーヒーの誕生から中世ヨーロッパにおける普及，そして輸出産品としてラテンアメリカに導入される歴史を概観している。さらに生産形態（生産者，品種，収穫方法），加工技術（精製・焙煎），流通構造など，輸出産品としての特色やそれらの違いを説明している。

これに続く第Ⅱ部では，主要生産国であるブラジル，コスタリカ，コロンビアのほか，近年生産と輸出の拡大が著しいベトナムや，これらの国々と比較する形でエルサルバドル，グアテマラも取り上げている。第Ⅲ部では消費国として米国，日本を取り上げるほか，コーヒー貿易を巡る生産国と消費国の対立や，輸入国同士の競争にも触れている。

途上国から輸出される農産品や工業製品の分析については，生産や輸出にとどまらず消費までを視野に入れたコモディティ・チェーンやフードシステムなどの研究が進んでいる。本書はコーヒーを巡る歴史について同様の視点から分析している。第2章で取り上げた輸出産品としての特色の違いが，コーヒー生産者や流通業者の政治経済的な力の違いを生み出し，同じ産品でありながら各国の歴史に与える影響が大きく異なった点が興味深い。　（清水達也）